カリキュラム・授業開発コース科目
「秋田型アクティブラーニングの授業デザインと評価」

学びの概念図

2522310　渡部　和朝
2522402　須藤　よしの
2522403　武石　早穂

秋田大学大学院教育学研究科教職実践専攻
２０２３年１月

社会科における「主体的・対話的で深い学び」を促す学習問題の作成

アクティブラーニング ➡ **主体的・対話的で深い学び**

2522310　渡部和朝

主体的な学び　対話的な学び

主体的・対話的な学びを引き出す学習問題の作成

主体的に学ぶとは

子どもが主体となって対象に働き掛けながら学びを展開

＜主体的に学ぶ子どもの姿＞

・課題意識　・問題解決の見通し
・成果の活用　・学習の持続、発展

学校での「主体的な学び」の体験は，**将来の「主体的な学び」に備え，社会について学び続ける意欲や態度，能力を育てることを目指している。**

対話的に学ぶとは

自分と様々な他者、さらに自分と自分が関わり合いながら学びを展開

＜対話的に学ぶ子どもの姿＞

・自分が発信者　・自分が受信者
・伝達者　・多様な他者との関わり

違った考えを認め合う，つまずいている友達を支える，多様な友達から学び合うなど，**将来の「共生」につながる力を育成することを目指している。**

深い学び

深い学びとは

＜深く学ぶ子どもの姿＞

・時間軸という視点での学びに変容　・空間軸という視点での横断的な学び
・社会的事象の見方・考え方を駆使

３つの資質・能力のすべてが身に付いた時に，「深い学び」が成立したと言える。

参考文献　北俊夫(2018).「主体的・対話的で深い学び」を実現する社会科授業づくり.明治出版図書.

授業改善のまとめ（学びの概念図）

思考を活性化させる授業（アクティブラーニング）
→生徒が科学者のように考える授業
→仮説演繹法の実践

authentic learning
（真正の学び）
＝深い学び

帰納的に
理論仮説を
立てることは
できた。

演繹的に
作業仮説を
立てるところで
つまずいた。

帰納法　演繹法

→時間配分や教師の支援,指導 を改善
する必要あり。

仮説を参照し
実験結果が
「真」なら
仮説を受容

音楽科と国語科のアクティブラーニングの授業デザインと評価
ー授業づくりの2つのポイントー

カリキュラム・授業開発コース　2522403武石早穂

音楽科/理科

・高等養護学校での合唱・合奏に教員の**指揮**を付ける実践
・小規模高校での合唱指導(**Nコン**出場)

学習者が自分で学びを進められる授業づくり

成功体験
個に応じた指導

・学習者の「できないかも」「やっても無理だ」という気持ちを払拭しなければならない。
・**成功体験**
「頑張ればもう少しでできるかもしれない」、
「やってみたら、できた」
・自分の**学習の成果**が自分で分かる学習活動
・成功体験のためには、学習課題の**難易度**設定が適切でなければならない。

【具体的な手立て】
成功までのマニュアル作り、学習者が活用する手引き、学習過程における選択肢の用意、学習時間の確保　等

リソースの把握
リソースの活用

・これから取り組んでいく活動について、「今**できていること**」「活用できそうなこと」は何かを把握する。
・**リソース**を基にした適切な目標設定による学習意欲の喚起が期待できる。
・学習者の背景、**興味関心**、将来の夢など
・地域、保護者と学校の関係性
・教職員間の理解
・時事的な事柄、ニュースなど。

【具体的な手立て】
学習者が取り組んできたことや興味関心を調査する、地域への学校教育の公開、ニュース記事の掲示　　等

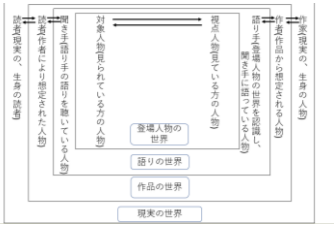
国語科

・文学体験の構造を生かした小学校での実践『白いぼうし』『気のいい火山弾』
・附属小学校での授業参観(小学6年国語科「詩を楽しもう『せんねん　まんねん』」)

学習者が自分の考えを表現できる授業作り

文学体験

・物語の読みを深めるには、語り手や作者を含めた**様々な立場に立つ**ことが必要。
・どの立場で考えたのかを学習者が意識できるようにする。
・考えを表現することで、学習者が自分の信念に気付く。
・教師は表現活動で創作されたものから、**学習者の信念を見取る**。



教師の関わり方

・読みを深めるためには、学習者に「**新しい立場**」を気付かせることが必要。
・「新しい立場」に気付かせるために、問いかけや表現活動を通して、今学習者が立っている立場と別の立場を往復させ、これまでとは異なる感覚を体験させる。
・学習者の**信念**を表出させるために、表現・創作する場面を設定する。
・学習者が表現したことに対し、学習者の信念を見取る(優勢な信念、優勢でない信念のどちらも)。

学びのまとめ

1.「学習者自身が学びに向かう力を発揮するために、教師ができることは何か」を検討する。
　→アクティブラーニングの授業デザインの検討は、学習者が既にもっている「学びに向かう力」を見取り、活用することからはじめる。
2.学習者が自ら課題設定して取り組み、ポジティブな自己評価(次の学びにつながる評価)ができる学習活動を検討する。
3.学習者が表現したものからは、学習者の経験や考え方(信念)を見取る。
4.学習者が学んでいる時、教師は「教える立場」から「教材提示をする立場」「整理する立場」となる。